価値形態または交換価値

「現代資本主義と『資本論』」の第4節　第2講

表題の「価値形態または交換価値」とは、簡単に言えば、商品に内在する価値が表に出てきたもの、すなわち価値の現象形態である。それは、抽象的人間労働が凝固したものである。価値は本質であり、商品に内在するが、目には見えない。

この内在的価値が外在化して、外に現れた物が価値形態または交換価値である。

マルクスは「貨幣の謎」（＝お金を出せばなんでも買える）を解き明かすためにお金をいくら眺めていてもわからない。物々交換、つまり商品にまで戻って考えよ、と言っている。商品の価値はその生産に必要な労働の量によって決まる。しかし、直接に労働量を表わすことはできない。

商品の価値は、ほかの商品との交換の中で現れる。交換のさい、商品がどういう形で表されるかを考えるのが価値形態論である。この形態を「追跡」していくことでマルクスは「貨幣の謎」が解けるという。商品交換から貨幣の発生を立証する。

　　価値形態の発展を追跡する

１台のオートマ車の交換価値は150万円または約750ｇの金である。これは（イ）式で表せる。

1台のオートマ車＝150万円または約750ｇの金　………（イ）式

このは地中から掘りだした使用価値である。この場合、一定量の使用価値で

あれば金でなく何でも良い。銀でも以下の例示、CDでも…。

「資本論」の本文p.88

価値表現の発展を、「もっとも簡単なめだたない姿態から目をくらませる貨幣に

至るまで追跡する…」ことで「貨幣の謎」が解ける。追跡の始めは、「もっとも簡単なめだたない姿態」、すなわち（1）式である。

Ⅰ　単純な、個別的な、偶然的な価値形態

1台のオートマ車＝500枚のCD

または、1台のオートマ車は500枚のCDに値する　 ……（1）式

ⅹ量の商品A＝y量の商品B

　　　　 　　または、x量の商品＝y量の商品Bに値する　…………… （1）´式

この単純な価値形態 ― 商品Aと商品Bの交換関係 ― のうちにすべての価値形態の秘密が潜んでいる。

（1）式は形式的には（イ）式と同じである。（イ）式が「目をくらませる貨幣形態（最高に発展した価値形態）である。一般化して、（1）´式は（イ）式の萌芽にあると捉えることが、ポイントである。

「（1）式」と二つの商品の果たしている役割

二つの商品はまったく違った役割を果たしている。オートマ車の「値」つま

り価値は500枚のCD**である。**CDはオートマ車の価値を表現する材料にす

ぎない。オートマ車は能動的役割を果たし、オートマ車の価値は**相対的価値形態**として定義される。

CDは受動的役割を果たし、CDはその等価として機能し、等価形態と定義される。

両形態は、相互依存の関係にあるが、同時に互いに排除し、対立し合う両極

である。だから（1）式において等価形態にあるCDは同時に相対的価値形態

にあることはできない。つまり、CDは自分の価値を表現することはできない。

オートマ車はＣＤで自分の価値を相対的に表現できる

第一に（1）式の基礎は、オートマ車＝CDという同等性関係である。オー

トマ車とCDはまったく違う。にもかかわらず両者は等しいと置かれている。

すなわち、（1）式の背後に同等性があることがある。

一般論で言えば、ある商品の価値は他の商品の一定量の使用価値で表現さ

れる。

第二に両者は価値として等しい。CDは価値物として通用し、またオートマ

車も価値として等価物のCDに関係する。価値関係はオートマ車の価値を表

現している。

一般論で言えば、逆になる。等価形態においては、使用価値がその反対物で

ある価値の現象形態になる。だからまた、（CDをつくる）具体的労働がその

反対物である抽象的人間労働の現象形態になる。

第三に相対的価値形態の内実

1台のオートマ車＝500枚のCD

オートマ車をつくる組立労働＝CDをつくるプレス労働

上記はオートマ車とCDは価値として等しい。さらに価値実体である抽

象的人間労働も

等しいことを示している。すなわち、「CDは自分のプラスチック製の体を

もってオートマ車の価値を表現している」のである。「オートマ車の価値がCD

のからだで表現される」－相対的価値形態の内実である。

一般化すれば、私的労働がその反対物の形態すなわち直接的に社会的な形

態の労働になる。

以上、商品A と商品Bが関係を見てきたが、Ａ、Ｂ以外の他の商品には関

係していない。したがって（1）式の右辺はＢ以外のどんな商品でもよい。（2）

式となる。

Ⅱ　全体的な、あるいは展開された価値形態

　　　　　　　　　　500枚の**CD**

　　　　　　　　　　　　　　　2万本のボールペン

　　　　　　　　　　　　　　　1000台の電卓　　　　　………　（2）式

1台のオートマ車＝　 30台の**CD** プレイヤー

750gの金

……………

n量の商品N

（2）式から言えること

① 1台のオートマ車の価値は、商品世界のN個の使用価値で実現される。

② 他の商品体はどれもオートマ車の価値の鏡となる。

③ 価値がほんとうに無差別の労働の凝固として初めて現れる。

④ オートマ車の価値を形成する人間の労働が、右辺の諸商品を形成する

人間の労働と等しい労働として表れる 。

　　　（2）式にも欠陥がある

① 商品の相対的な価値表現は未完成にある。現代社会では新たな商品が

次々に出てくる。無限に続く。

1. （2）式は（1）式に分解し、バラバラな価値表現の寄せ集めにすぎな

い。

③　N個の商品の価値を表現するためには、N個の（2）式が必要になる。

等価形態にしてもN個の特殊的等価形態がなければならず、お互に排除

し合う。各等価物に含まれている各具体的有用労働も、抽象的な人間労働

の一つの特殊的形態にすぎず、一般的な現象形態ではない。（2）式は（1）

式の総計である。

1台のオートマ車＝500枚のCD

1台のオートマ車＝3万本のボールペン

**…………………………………**

上の等式はどれも逆の関連を含んでいる。ある人がオートマ車を他のN個の商品と交換し、オートマ車の価値をN個の商品で表現するとすれば、逆に必然的に、他のN人の商品所有者もまた、彼らの商品をオートマ車と交換しなければならない。したがって、彼らのN個の商品の価値をオートマ車で表現しなければならない。

かくして（3）式が得られる。

Ⅲ　一般的等価形態

500枚のＣＤ

　　　 3万本のボールペン

　　　 1000台の電卓

30台の**ＣＤ**プレイヤー　　 ＝一台のオートマ車　………　（3）式

750gの金

……………

n量の商品N

この式では、いろいろな商品は、それぞれの価値をたった一つの同じ商品（オートマ車）で統一的に表している。諸商品の価値形態は単純で共通で一般的である。この一般的な価値形態は、商品世界の共通の仕事としてのみ成立する。

商品世界の一般的な相対的価値形態は、商品世界から一つの等価物を排除し、一般的等価物とする。

（3）式では、オートマ車の自然形態がこの商品世界の共通な価値の姿となる。車という形が、すべての人間労働の目に見える化身となる。車を組み立てる私的労働が、一般的な社会的労働となり、人間労働一般の一般的な労働形し態となる。

（3）式においては、右辺の一般的等価形態は、別のオートマ車でなければならないということではない。どの商品でもかまわない。この商品が最終的に一つの独自の商品に限定されると、はじめて商品世界の統一的な相対的価値形態は客観的に固定されることになり、社会的に妥当ということになる。この特殊な商品は、貨幣商品である。かくしてが歴史的に貨幣になった。そこで（3）式は（4）式となる。

Ⅳ　貨幣形態

一台のオートマ車

500枚のＣＤ

　　　 3万本のボールペン

　　　 1000台の電卓　　　　　 　＝ 750gの金　………………　（4）式

30台の**ＣＤ**プレイヤー

………………

………………

n量の商品N

　この貨幣形態は、同時に価格形態である。金1ｇ=2000円とすれば、1台のオートマ車=150万円となる。これが、オートマ車の価格形態である。

貨幣形態の謎は解けた。その萌芽は簡単な価値形態にあった。